

付加文

——COBUILDDirect利用の一研究

稲 木 昭 子

A Corpus-Based Approach to Tag Sentences

Akiko INAKI

1. はじめに

付加文(tag sentences)に関する用語をNässlin(1984)から借用し、付加部をT(tag)、付加部に先行する文をRC(reference clause)、RCとTの肯定・否定の極性が一致しないものをRp(reversed polarity)、極性一致のものをCp(constant polarity)とそれぞれ略記する。従って付加文の形式は、'RC, T?'と表記されることになる。

RCは一般的に平叙文あるいは命令文であるが、感嘆文、疑問文も可能であるとされている。Tは一般的に、平叙文の主節に対応して「(助)動詞+主語」の順で表れる。平叙文に助動詞が含まれていればその助動詞が、一般動詞の場合は、'do'をその主動詞の時制と数に一致する形になおし、主語にも適切な人称代名詞を選ぶ。RCが命令文の場合のTは平叙文の場合ほど簡単ではないが、一般的にwill you?, won't you?, can you?, can't you?等があげられる。RCとTの肯定・否定の極性は一般的には一致しない。一致する場合のうち、肯定・肯定の場合は従来認められているが、否定・否定の場合は問題を提起している。

このような付加文が実際にどのような形式で、またどのように使用されているのかを、Tの部分を検索項目としてCOBUILDDirectで調べ、その抽出結果を言語処理プログラムのWordSmithで処理し、付加文の用例を抽出する。

この用例結果を四つの点から検討し、付加文の実際の用法をとらえ直すことにする。まず各検索項目のコーパス別の頻度数から、付加文そのものの使用における英・米語の差およびコーパス別の表出差を検討して付加文の使用に関する基本を押え、次にRCの方に注目して、RCに表出される文の形式およびRCと後続するTの意味論的・語用論的関係を再考する。この点は次に調べるTとして抽出されない項目のうち、法助動詞の場合を検討することによって補強される。さらにRCとTの肯定・否定の極性の分布から、特にCpの特異性をとりあげる。

2. COBUILDDirectによる検索

2.1. COBUILDDirect

COBUILDDirectの検索可能対象は5000万語で、11のサブコーパス (①BBC ②NPR ③OZNEWS ④TIMES ⑤TODAY ⑥UKBOOKS ⑦UKEPHEM ⑧UKMAGS ⑨UKSPOKEN ⑩USBOOKS ⑪USEPHEM) に下位区分される。これを簡単にまとめると次の表になる。

表1 検索可能コーパス (数字の単位は100万語) (検索年月: 1998.1)

豪語						ozn 5
英語	uke 3	ukm 5	uks 10	bbc 3	ukb 5	tim 5 tod 5
米語	use 1			npr 3	usb 5	

2.2. 検索項目リストおよび手順

検索項目リスト

am+I(+not), is+PPS(+not), isn+t+PPS, are+PPS(+not), aren+t+PPS, was+PPS(+not), wasn+t+PPS, were+PPS(+not), weren+t+PPS, does+PPS(+not), doesn+t+PPS, do+PPS(+not), don+t+PPS, did+PPS(+not), didn+t+PPS, can+PPS(+not), can+t+PPS, could+PPS(+not), couldn+t+PPS, , may+PPS(+not), mayn+t+PPS, might+PPS(+not), mightn+t+PPS, must+PPS(+not), mustn+t+PPS, need+PPS(+not), needn+t+PPS, dare+PPS(+not), daren+t+PPS, ought+PPS(+not), oughtn+t+PPS, has+PPS(+not), hasn+t+PPS, have+PPS(+not), haven+t+PPS, had+PPS(+not), hadn+t+PPS, will+PPS(+not), won+t+PPS, would+PPS(+not), wouldn+t+PPS, shall+PPS(+not), shan+t+PPS, should+PPS(+not), shouldn+T+PPS

検索手順

上記の項目を検索した結果には付加文でないものも含まれる。たとえば、検索項目が 'will+PPS' / 'won+t+PPS' の場合には、The question is, will he? / WILL they, won't they?等の例文も含まれる。そこでCOBUILDDirectの検索結果から、WordSmithを使用して 'RC, T?' の形式を確認しつつ手作業で付加文のみを選択することにする。その検索結果表は論文末に資料として添付している。

3. 考察

資料の検索結果表から、付加文のコーパス別頻度数を表す表、RCの統語形式による分類表、Tとして抽出されない項目、肯定・否定の極性別頻度数を表す表を作成し考察する。

3.1. コーパス別頻度数

表2 コーパス別頻度数

corpus	ozn	uke	ukm	uks	use	bbc	npr	ukb	usb	tim	tod	total
size(m.)	5	3	5	10	1	3	3	5	5	5	5	50
tags	31	15	116	0	2	25	104	628	490	76	87	1574

表2からいくつかの点が明らかになる。まず同じジャンル (newspapers) を比較すると、ozn は tim および tod の約半分、またtim および tod はほぼ同じ数値なのでクオリティ紙とタブロイド紙の差はないと考えられる。‘ephemera’ のuke、useはコーパスの大きさは異なるものの、全体の中で低い数値 (15, 2) を示している。‘spoken’ としてはukspokenのみであるが、ここからは用例は全く抽出されていない。‘transcripts from broadcasts’ のbbc,npr はそれぞれ 25,104 で、英米の差ははっきりしており、米語が英語の約 4 倍強になる。‘books’ と ‘newspapers’ を比較すると、たとえば英語の場合、ukbとtim,todはそれぞれ628,76,87 となり、‘books’ における付加文の使用の頻度が目立つ。‘books’ と ‘transcripts from broadcasts’ を調べると、1118と129(コーパスの大きさを考慮に入れて単純計算すると215)となり、やはり ‘books’ における付加文の使用の頻度が目立つ。‘books’ における英米の差は、英語が米語の約1.3倍となる。

ukspokenの0という数値は特筆に価する。実際に話されたものがコーパス化されたukspokenの分野で、この付加文が一例も抽出されないということは、話し言葉の中で付加文がまず使用されないということになる。ところが、放送英語を書き表したbbc, nprでは抽出されているので、この場合の結果を考えあわせると、付加文は日常の会話の場よりは、放送英語のような聞き手を意識したよりformalな場で使用されていることになる。

そうすると ‘books, magazines, newspaperaers’ の分野の高い使用頻度数はどのように考えればよいのであろうか。本・雑誌・新聞等はいわゆる「書かれたもの」であり、当然書き手が存在することになる。これらの分野で使用される付加文は、書き手が話し手を想定してそのことばを書いた、あるいは話し手が実際に発話したものを書きとめたものということになる。

そこでこの「書いたあるいは書きとめた」という点から付加文をとらえ直すことができる。たとえば、話し手が実際に ‘John is a liar.’ と発話するときには、/ジョンはうそつきだ/という命題内容に対し、これを断定したり、幾分か躊躇を示したり、確信がもてなかったり、相手に判断をまかせようとしたりと、さまざまな話し手の命題内容に対する心的態度が付随する。発話の際には超分節音素の助けで、種種の話し手の意図が含意可能である。ところがこれを文字化しようとするとき、つまり「書こう」とするときには、話し手の意図を盛り込んで形式化する必要がでてくる。このときたとえばJohn is a liar?あるいはJohn is a liar.といった文末の記号表記で質問なり、断定を表すこともできる。さらにJohn is a liar, isn't he? あるいは、is he?を

付加することにより、話し手の断定をさける態度等が表される。つまり、付加文は実際の発話に含意される話し手の心的態度をも盛り込む形で、それを形式的に表出するための一つの有効な形式としても機能していることになる。

本・雑誌・新聞等の「書かれたもの」の中で多用される付加文形式は、この心的態度を形式的に表出するための一手段として用いられたのではないかと考えられる。もちろん、実際に発話された付加文が文字化されることもおこりうるが、この場合はukspokenの0という数値から考えると、極端にその頻度は少ないとみられる。

3.2. RCの統語形式

表3 RCの統語形式による分類

	ozn	uke	ukm	uks	use	bbc	npr	ukb	usb	tim	tod	total
Dec	31	15	115	0	1	25	103	582	455	76	87	1490
Inter	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Imp	0	0	1	0	1	0	1	45	35	0	0	83
Exc	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
total	31	15	116	0	2	25	104	628	490	76	87	1574

RCは一般的に平叙文あるいは命令文であるが、感嘆文、疑問文も可能であるとされている。ということは感嘆文、疑問文の場合の使用頻度はあまり高くないということになるが、はたしてどの程度使用されているのであろうか。

付加文のRCの 94.7% が平叙文であり、命令文は全体の5.3%で、しかもこの場合ukb, usbに集中している。疑問文は可能とされているものの一例も抽出されず、感嘆文はukbでわずか一例見られる。以下RCが平叙文の場合と命令文の場合に分けて例文を引用し、何に対応してTがつけられるのかをまとめることにする。

RCが平叙文の場合

- (1) But then I don't suppose being any good is really the point, is it?
- (2) I guess it's not that important to know exactly where you are, is it?
- (3) But I suppose the money ain't in dirt these days, is it?
- (4) Yes, I believe you spent a whole year in Italy, didn't you?
- (5) I think it's a majority, isn't it?
- (6) I guess that sounds a bit idealistic, doesn't it?

全てTはRCの補文に対応して付加されている。ある種の述語は、一人称単数の主語を持ち現在形で使用されるとき、その述語が含まれる主文の意味内容はかなりの程度に弱められ、極端な言い方をすれば、取り除いても意味はほぼかわらず、補文内容が話し手の実質的な主張内容

になる。そしてその補文に対しTがつく。つまりTはRCの文全体のなかで意味的にもっとも重要な内容に対応して、話し手がその内容にある不確かさをもつとき付加されることになる。

(7) It makes me feel very stressed, which isn't good for the baby, is it?

Tは、主文ではなく非制限的関係代名詞節から作られている。

(8) It's so outlandish that it could almost be true, couldn't it?

(9) Fox hunting is necessary because foxes are pests, aren't they?

that節、because節に対してTが付加されている。

(10) Everybody's waiting for me to get hit, aren't they?

(11) Nobody likes a victim, do they?

統語的ルールよりも話し手の頭の中にある実質的内容が優先されて、RCの単数主語が、Tのところでは、複数主語へと変わった例である。

Tが何に付加されるかという点については、実例から、T後続の一般的な統語規則に付け加えて、多分に語用論的な規則が重要であることが分かる。TはRC全体のなかで、話し手が主張する内容のもっとも重要な部分を表す節に対応して作られ、しかも話し手が主張内容の真実性に対して幾分の気がかりを感じている時に後続される。その確信の度合いが低い場合は、聞き手に「命題—真」の確認を求める疑問に近い形になり、またその確信の度合いが高いときは、聞き手に単に同意あるいはあいづちを求めるといった意図をもって発話される。

RCが命令文の場合

RCが命令文の場合のTを分類すると次の結果になる。

letで始まる文のtag: can we?(2) shall we?(8)

肯定・肯定: can you?(2) will you?(57) would you?(4)

肯定・否定: won't you?(4)

否定・肯定: will you?(6)

否定・否定: 該当例なし

letで始まる命令文の場合は、80%でshall we?、20%でcan we?が後続する。その他の命令文で、肯・肯の場合はその90%のTにwill you?がみられ、肯・否の場合はwon't you?のみ、否・肯の場合もwill you?のみしか抽出されない。従って付加付き命令文のTの助動詞には、従来言われているような多様化は見られず、willが多用されていることになる。この点を考えてみることにする。

付加付き命令文は、統語的に「命令文＋疑問文」という並列的な複合文構造から成り立ち、後者の重複部分を削除することによってTが生成されたとみられている。このTの部分の疑問文にくるものは全く無制限というわけではなく、命令文と並列されるがゆえに、疑問文に語用論的

な条件が課せられる。つまり、Tの部分は命令文の発話行為をかなり固定して表現できる疑問文に限られることになる。たとえばともに間接的に＜依頼＞を遂行する疑問文である、Will you take me home? と Can you take me home? を比べると、前者は聞き手により返答の自由を与える。つまりyes と返答しようとnoと返答しようとその返事は全く聞き手次第である。一方後者は、相手に能力を聞く形で、しかも相手の負担の要求を遂行するという点ですっと巧妙であり間接性も増す。聞き手が「…の能力がないから、話し手の依頼する行為はできない」といって断る口実も与えることができる。ということは依然として聞き手の能力を質問するという力が残っていることになる。従ってより無色の、中立的な意味ということで、will you? / won't you?がTのところに表れると考えられる。

RCが感嘆文の例として、Huddleston (1970) は、How elegantly she dresses, doesn't she?の例をあげている。感嘆文は自分の得た感銘、印象等を聞き手に伝え、相手になんらの返答も要求しないし、また返答をもらえるとも思っていない。ところがこれにTが後続することにより、話し手はRCの内容に聞き手の確認を期待する。COBUILDDirectで抽出される次の1例は注意を引く。

(12) Ah, Henry, how you'd have loved # those coins, wouldn't you?

3.3. Tとして抽出されない項目

検索項目の用例がすべて見つかるわけではない。代名詞が何であれ、すべての場合で抽出されない項目を以下に列挙する。

were+PPS+not / does+PPS+not / do+PPS+not / can+PPS+not / may+PPS, mayn+t+PPS, may+PPS+not / might+PPS / must+PPS, mustn+t+PPS, must+PPS+not / need+PPS, needn+t+PPS, need+PPS+not / dare+PPS, daren+t+PPS, dare+PPS+not / ought+PPS, oughtn+t+PPS, ought+PPS+not / has+PPS+not / had+PPS+not / will+PPS+not / would+PPS+not / shall+PPS+not / should+PPS, should+PPS+not

従来may, must, need, dare, ought等はTにも認められるとされているが、実際には一例も見つからない。これらの助動詞がRCにでてくる場合でそれにTが付加された場合はわずか一例しか抽出されない。

(13) That must be the hardest option of # the three, isn't it?

このmustは陳述緩和的意味の用法であり、命題内容に対して話し手自身の心的態度を表明し、命題内容をそのまま事実として認めるのではなく、何らかの自分のコメントを付加する機能をもつ。そこでこの部分はTの付加される対象にはならない。例文は、It is certain that that is the hardest opinion of the three. と書き換え可能であり、この補文に対してTが後続していることになる。このように法助動詞の場合も例外ではなく、Tが話し手の主張の実質的内容に対応

して作られている点を確認できる。

3.4. 「肯定・否定」の極性別頻度数

表 4 肯定・否定の極性別頻度数

	ozn	uke	ukm	uks	use	bbc	npr	ukb	usb	tim	tod	total
Dec pos,neg	24	10	77	0	1	17	77	358	289	53	54	960
Dec neg,pos	7	4	33	0	0	6	25	179	141	21	30	446
Dec pos,pos	0	1	5	0	0	2	1	44	25	2	3	83
Dec neg,neg	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
Imp pos,pos	0	0	1	0	0	0	1	42	30	0	0	74
Imp pos,neg	0	0	0	0	1	0	0	1	2	0	0	4
Imp neg,pos	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	5
Imp neg,neg	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Exc								1				1
total	31	15	116	0	2	25	104	628	490	76	87	1574

表の上から二つがRp、次の二つがCpの場合である。明らかになる点を列挙していくと、oznではすべてRpで、Cpの例は抽出されない。Rpで肯・否の場合が、否・肯の場合の2.2倍になり、無標的には話し手が肯定的命題を述べ、これに付加部をつけ加えて、相手に確認、同意、相づちを求めていることになる。CpとRpを比較すると、RpがCpの約16.7倍で、Rpは全体の94%を占める。Cpは全体の6%で、通常は肯・肯で表れ、否・否の場合はわずかに一例がukbで抽出された。このCpの英米の差を考えると、米語より英語の方で好まれる傾向にある。

以下Cpの例をいくつか引用する。

(14) Then, it's settled, is it?

(15) So you are on the side of all these aggressive feminists, are you?

(16) She turned to Jahdo. So, lad. You come from the Rhiddaer, do you? I do.

(17) So he was Noriega's brother officer and he passed all the gossip on the man along to you, did he?

(18) Miss Autumn said no. She said you was to have supper # with her. Oh she did, did she?
Yes, she did.

(19) So I'll do that, shall I?

Cp 付加文は、基本的に相手のことばを問題にし、RCにおいて提示されたその内容に対する単なる反応、確認ということから、さらにそれに皮肉・不信を表現し、一種の強い感情表現とし

て相手に ‘not RC’ を期待するところまでいく。感情表現の表われとして、文頭に ‘Oh’ や ‘So’ 等が多くみられる。

Cp 付加文の否・否の場合は、Lakoff(1969)では非文とされ、Quirk et al.(1985)では、論理的には可能であるが実際に使用されないと説明される。COBUILDDirectではわずか一例抽出された。

(20) Senna had not rejoined the track where he had left it but taken a short cut, hadn't he?
Everybody had seen that, too.

付加付き命令文の肯・否の極性については、従来RCが肯定の時Tに肯・否の両方が表れるとされる。COBUILDDirectでは、付加付き命令文83例中89.2%が肯・肯で、肯・否はわずか4例が得られる。RCが否定形の時Tに肯定が表れることに関しては、意見が分かれ、Arbini(1969)では非容認、Huddleston(1970)では容認されている。Hudson(1975)もこの形は ‘possible for me’ と説明する。一方Tに否定がくるのは非文であるとされている。COBUILDDirect検索では、否・肯は5例であるが、否・否の場合は全く抽出されない。

4. おわりに

付加文の形式を確認したあと、COBUILDDirectで付加文を抽出し、その検索結果を4つにまとめて考察した。

コーパス別頻度数からは、付加文は書かれたものの中で使用される口語表現、および実際に発話される口語表現としては聞き手を意識したよりformalな場合で使用され、日常の会話の中ではまずでてこないことが認められた。英米語の使用差としては、書かれたものの中の表現としては英語の中でより使用され、よりformalな口語表現としては米語の中でよく使用される。RCの統語形式による分類からは、付加文のRCはほとんどが平叙文で、一部命令文が表れ、疑問文は一例も抽出されず、感嘆文もわずかに一例見られたのみである。このRCを検討することにより、TがRCの何に対応して形成されるかがより明確になった。この点はTとして抽出されない項目のうち法助動詞の含まれるRCに、どのようなTが後続するかをみることによっても確認された。肯定・否定の極性分布からは、特にCp付加文の頻度数の低さ、およびどちらかといえば米語より英語で使用されることが認められた。命令文の場合、従来問題になっているRCが否定のときの、否・肯が5例確認され、否・否の場合は全く抽出されなかった。

資料 検索結果表

	oznews	ukephem	ukmags	ukspok	usephem	bbc	npr	ukbooks	usbooks	times	today	
am I	0	0	1	0	0	0	0	[1] 5	5	0	2	14
amI not	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
isit	1	0	[1] 10	0	0	2	4	[11] 24	<1> [6] 20	[1] 3	4	88
ishe	0	0	[1] 1	0	0	0	1	6	6	0	2	17
isshe	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	6
isntit	9	1	31	0	1	5	26	93	62	20	18	266
isnthe	0	0	4	0	0	0	4	13	9	0	1	31
isntshe	0	0	1	0	0	0	0	12	7	1	4	25
isitnot	1	0	0	0	0	2	2	4	0	0	0	9
ishenot	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
isshenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
arewe	0	0	0	0	0	0	2	[2] 3	[1] 1	[1] 1	0	10
areyou	0	[1] 1	[1] 1	0	0	0	3	[10] 18	[3] 12	2	1	52
arethey	1	0	4	0	0	0	3	2	[2] 4	0	1	17
arentI	0	0	2	0	0	0	0	3	2	0	2	9
arentwe	0	0	0	0	0	1	1	5	2	1	2	12
arentyou	0	0	3	0	0	0	0	34	24	2	1	64
arentthey	2	2	6	0	0	3	4	4	4	0	1	26
arewenot	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
areyounot	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	3
aretheynot	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	4
wasI	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
wasit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
washe	0	0	0	0	0	0	0	2	[1] 1	0	1	4
wasshe	0	0	0	0	0	0	0	[1] 1	1	0	1	4
wasntI	0	0	1	0	0	0	0	3	2	0	0	6
wasntit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
wasnthe	0	0	0	0	0	0	1	3	5	0	0	9
wasntshe	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	4
wasInot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
wasitnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
washenot	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
wasshenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
werewe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
wereyou	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
werethey	0	0	1	0	0	0	0	[1] 1	1	1	0	4
werentwe	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
werentyou	0	0	1	0	0	0	1	6	3	1	0	12
werentthey	0	0	0	0	0	1	0	3	3	0	0	7
werePPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
doesit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
doesshe	0	0	0	0	0	0	1	0	[1] 1	0	1	3
doesshe	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
doesntit	4	2	6	0	0	1	9	13	12	3	3	53
doesntshe	0	0	0	0	0	0	1	4	3	0	0	8
doesntshe	0	0	0	0	0	0	1	1	4	0	1	7
doesPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
dol	0	0	2	0	0	0	0	3	1	0	0	6
dowe	1	0	0	0	0	0	2	11	2	0	0	16
doyou	1	0	[1] 2	0	0	[1] 2	0	[9] 38	[2] 27	4	[1] 3	91
dothey	0	0	[1] 2	0	0	0	1	[1] 1	[1] 6	0	3	16
dontI	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
dontwe	0	1	2	0	0	0	0	8	6	2	1	20
dontyou	2	0	1	0	0	0	5	40	38	1	5	92
dontthey	0	0	4	0	0	1	6	7	9	3	1	31
doPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didI	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
didwe	0	0	0	0	0	0	0	[1] 1	4	0	0	5
didyou	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didhe	0	0	0	0	0	0	0	4	[5] 5	0	0	14
didshe	0	0	0	0	0	0	0	[2] 1	2	0	0	4
didthey	0	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	4
didntI	0	0	0	0	0	0	1	3	11	1	0	16
didntwe	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	6
didntyou	1	0	1	0	0	0	2	19	22	2	1	48
didntit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didnthe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didntshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

付加文——COBUILDDirect利用の一研究

didn'tthey	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didn'tnot	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
didn'twenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didn'tyounot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didn'tnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didn'thenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didn'tshenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
didn'ttheynot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
canI	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
canwe	0	0	0	0	0	0	0	0	<1>	6	<1>	3	0
canyou	1	0	1	0	0	0	0	0	<1>	4	<1>	11	5
canit	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	3
canhe	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2
canshe	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
canthey	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
can'tI	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
can'twe	1	0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	6
can'tyou	0	0	0	0	0	0	0	0	3	6	1	0	10
can'tit	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
can'the	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
can'tshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
can'tthey	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	3
canPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
couldI	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
couldwe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
couldyou	0	0	0	0	0	11	0	0	3	1	0	0	5
couldit	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	1	1	6
couldhe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3
couldshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
couldthey	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
couldn'tI	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
couldn'twe	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
couldn'tyou	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	0	0	4
couldn'tit	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
couldn'the	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
couldn'tshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
couldn'tthey	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
couldn'tnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
couldn'twenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
couldn'tyounot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
couldn'tnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
couldn'thenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
couldn'tshenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
couldn'ttheynot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mayPPS	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mayn'tPPS	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mayPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightPPS	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'tI	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'twe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'tyou	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'tit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'the	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
mightn'tshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'tthey	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'tnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'twenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'tyounot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'tnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
mightn'thenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'tshenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mightn'ttheynot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mustI	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mustwe	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
mustyou	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mustit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
musthe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mustshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mustthey	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mustn'tI	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mustn'twe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mustn'tyou	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

稲 木 昭 子

mustntit	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	1	4
mustnth	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
mustntshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mustntthey	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mustPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
needPPS	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
needntPPS	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
needPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
darePPS	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
darentPPS	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
darePPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
oughtPPS	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
oughtntPPS	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
oughtPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
hasit	0	1	1	0	0	0	0	[1]	1	0	0	4
hashe	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	[1]	3
hasshe	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
hasntit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
hasnth	0	0	1	0	0	0	0	2	1	0	0	4
hasntshe	0	0	1	0	0	0	0	3	1	0	0	5
hasPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
haveI	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
havewe	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
haveyou	0	0	0	0	0	1	[1]	1	9	[1]	6	21
havethey	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
haventI	0	0	2	0	0	0	0	2	1	0	0	5
haventwe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
haventyou	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
haventthey	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	3
havenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
havenenot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
haveyounot	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
havethevnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
hadI	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
hadwe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
hadyou	0	0	0	0	0	0	0	[1]	0	0	0	1
hadit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
hadhe	0	0	0	0	0	0	0	1	[1]	0	0	2
hadshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
hadthey	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
hadntI	0	1	0	0	0	0	0	4	1	0	0	6
hadntwe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
hadntyou	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
hadntit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
hadnth	0	0	0	0	0	0	0	[[1]]	1	3	0	5
hadntshe	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
hadntthey	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
hadPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
willI	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
willwe	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
willyou	0	1	<1>	0	0	0	<1>	<33><2>	1	<22><3>	5	71
willit	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
willhe	0	0	0	0	0	0	0	[1]	1	0	0	2
willshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
willthey	0	0	0	0	0	0	0	[1]	0	0	0	1
wontI	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	2	5
wontwe	0	0	0	0	0	0	1	2	3	0	0	6
wontyou	0	0	1	0	<1>	0	2	<1>	9	<2>	4	21
wontit	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	4
wonth	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
wontshe	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
wontthey	0	0	0	0	0	0	1	0	2	2	0	5
willPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
wouldI	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2
wouldwe	0	0	0	0	0	0	2	1	1	0	0	4
wouldyou	0	1	2	0	0	[1]	1	2	5	<4>	3	22
wouldit	0	0	0	0	0	0	0	6	1	1	2	10
wouldhe	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1	0	5
wouldshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
wouldthey	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	4
wouldntI	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
wouldntwe	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2

付加文——COBUILDDirect利用の一研究

wouldnty	2	1	0	0	0	0	0	0	*1	5	1	0	0	10
wouldntit	0	0	4	0	0	0	0	1	9	3	6	2	25	
wouldnthe	0	2	0	0	0	0	0	0	5	1	2	2	12	
wouldntshe	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	1	4	
wouldntthey	1	0	0	0	0	0	0	1	3	0	1	1	7	
wouldPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shall	0	0	0	0	0	0	0	0	[1]	0	0	0	1	
shallwe	0	0	0	0	0	0	0	0	<7>	<1>	0	[1]	9	
shallyou	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shallit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shallhe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shallshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shallthey	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shantI	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shantwe	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	
shantyou	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shantit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shanthe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shantshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shantthey	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shalPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shouldPPS	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shouldntI	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	
shouldntwe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shouldnty	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	
shouldntit	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3	
shouldnthe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shouldntshe	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
shouldntthey	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	3	
shouldPPSnot	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

使用記号

< > : RCが肯定の命令文

<< >> : RCが否定の命令文

[] : Cp付加疑問文 肯定

[] : Cp付加疑問文 否定

* : RCが感嘆文

検索時期：1998年1月

参考文献

- Arbini, R. (1969) 'Tag-questions and tag-imperatives in English' *JL*. 5. 205-14.
- Cattell, Ray. (1973) 'Negative Transportation and Tag Questions' *Lg*. 49. 3. 612-39.
- Downes, W. (1977) 'The Imperatives and Pragmatics' *JL*. 13. 77-97.
- 福地 肇 (1985)『談話の構造』大修館書店.
- Green, Georgia M. (1976) 'Main Clause Phenomena in Subordinate Clauses' *Lg*. 52. 2. 382-97.
- Hooper, Joan B. (1975) 'On Assertive Predicates' in Kimball, John P. (ed.). *Syntax and Semantics*. Vol. 4. Academic Press. 91-124.
- Huddleston, R.D. (1970) 'Two Approaches to the Analysis of Tags' *JL*. 6. 215-22.
- Hudson, R. A. (1975) 'The Meaning of Questions' *Lg*. 51.1.1-31.
- 稲木昭子 (1985)「付加つき命令文の語用論的側面」『追手門学院大学文学部紀要』第19号. 97-112.
- (1986)「2種のwon't you?」『英語青年』Vol. CXXXII No. 7. 研究社出版.
- (1990)「極性一致の付加疑問文—談話の流れの中で」『言語研究』97. 73-94. 日本言語学会.
- (1992a)「付加部の伝えるもの」『英語青年』Vol. CXXXVII No. 12. 研究社出版.
- (1992b)「談話分析—Cp付加疑問文とEcho発話の場合」『成田義光教授還暦祝賀論文集』217-28. 英宝社.
- Lakoff, R. (1969) 'A Syntactic Argument for Negative Transportation.' *CLS*. 5. 140-7
- (1972) 'Language in Context' *Lg*. 48. 4. 907-27.
- Leech, G. N. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman Group Ltd.
- 毛利可信 (1980)『英語の語用論』大修館書店.
- Näasslin, S. (1984) *The English Tag Question*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- 中右 実 (1994)『認知意味論の原理』大修館書店.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman Group Ltd.
- Sinclair, J. McH. (1972) *A Course in Spoken English: Grammar*. Oxford: Oxford Univ. Press
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. (1981) 'Irony and the Use-Mention Distinction' in P. Cole (ed.). *Radical Pragmatics*. 295-318. Academic Press.
- Swan, Michael (1980) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Tannen, Deborah (1984) *Conversational Style*. New Jersey: Ablex Publishing Corp.
- (1989) *Talking Voices*. Cambridge: Cambridge University Press.